

連載 （供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第十一回 祭祀の民

南出喜久治（令和7年2月1日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

古代ケルト人や原始ゲルマン人などのすべての古代人は、日本民族と同様に祭祀の民でした。古代人が自然の中で生活し、その経験の蓄積の中から自然発生的に生まれたのが祭祀です。祖先の営んできた知恵と経験の積み重ねによつて代々の生活が守られてきたことが子孫の拠り所であり、そのことに感謝することは人間の持つ素直な感情の発露です。

祖先に感謝し、自然に感謝し、そして、一族を危機から命をかけて救つてくれた英霊への感謝は民族共通のものでした。

そして、その感謝の心は、自然界に存在するあらゆる事物を大切にする心を生み、その事物のすべてに固有の命と靈魂が宿つてゐるとの万物有魂の思ひ抱くことになります。そして、万物を依り代として祖霊が降臨すると信じて、祭祀を行つてきたのです。

これがエドワード・タイラーが説いたアニミズムであり、その弟子のロベルト・マレットの説いたアニマティズム（プレ・アニミズム）です。

タイラーは、これを宗教の起源である原始宗教であると認識しましたが、靈魂不滅、祖霊信仰、輪廻転生などや自然崇拝などを原始宗教とすることは決して誤りではないとしても、これらが派生した根源である本体としての祭祀自体を認識することができず、これらを押しなべて原始宗教としたことは大きな誤りでした。

つまり、祭祀の存在を認識できなかつたことから、信仰世界には祭祀と宗教があることの認識と区別ができず、信仰の概念を宗教のみと平面的に捉へて、信仰はすべて宗教だと誤つた結論を導いたことは当然と言へます。

祭祀の民には、概ね、靈魂不滅、祖霊崇拝、輪廻転生、自然崇拝、森の中での祭祀の営みを行ふといふ共通点があります。これは、祭祀から自然的に派生する経験に基づくものであり、祭祀と不可分一体となるもので、これらの総体が祭祀の複合的な体系と言へます。

このことは、古代ケルト人、原始ゲルマン人、そして日本人などの祭祀の民に共通した特徴です。